

弘前市立石川小・中学校等複合施設整備事業基本設計業務
公募型プロポーザル審査結果報告書

令和2年12月

弘前市立石川小・中学校等複合施設整備事業基本設計業務
公募型プロポーザル審査委員会

1. 審査結果

最優秀者：教育施設研究所・三上設計 設計共同体

(株式会社教育施設研究所東北事務所、三上設計有限会社)

優 秀 者：昭和設計・中央設計共同体

(株式会社昭和設計仙台事務所、有限会社中央設計)

2. 審査委員会の組織

役職	氏 名	所 属
委員長	馬渡 龍	八戸工業高等専門学校産業システム工学科環境都市・建築デザインコース准教授
委員	片岡 俊一	弘前大学大学院理工学研究科教授
委員	高橋 興	青森中央学院大学経営法学部教授
委員	土井 良浩	弘前大学大学院地域社会研究科准教授
委員	成田 宏之	(株)建築住宅センター代表取締役社長
委員	齋藤 伸造	石川中学校区学校運営協議会会長（石川公民館長）
委員	小田桐 久	石川地区町会連合会会長（大沢町会長）
委員	天内 隆範	弘前市建設部長
委員	木村 和彦	弘前市建設部建築住宅課長
委員長代理	鳴海 誠	弘前市教育部長

3. 選定概要

(1)選定方法

弘前市立石川小・中学校等複合施設整備事業基本設計業務においては、弘前市立石川小・中学校等複合施設整備事業基本構想に基づき、当市が求める条件に対する創意工夫や豊かな発想、諸課題の解決につながる技術提案ができる、より高度で専門的かつ技術的に最適な設計者を選定するため、公募型プロポーザル方式を採用した。

(2)参加意思表明者

5 者

(3)参加意思表明書の審査

設計共同体から提出された参加意思表明書類について、弘前市立石川小・中学校等複合施設整備事業基本設計業務公募型プロポーザル実施要領に基づき、事務局である弘前市教育委員会学校整備課において審査の結果、参加意思表明した全設計共同体に企画提案書の提出を要請した。

(4)企画提案書を提出した設計共同体

5者

(5)プレゼンテーション及びヒアリング

企画提案書を提出した全設計共同体に参加を要請し、提出された企画提案書をもとに、企業評価（実績や実施体制）、企画提案（設計業務の実施方針、特色ある施設づくりに関する計画方針、施設の各種整備方針、その他設計共同体による自由提案）についての評価を行った。

評価にあたっては、企画提案書を提出した5者について、個別にプレゼンテーション及びヒアリングを実施した。

(6)企画提案書評価点

順位	設計共同体名	得点 (満点 100 点＋自由提案 3 点)
1	教育施設研究所・三上設計 設計共同体	72.4
2	昭和設計・中央設計共同体	71.475
3	設計共同体A	60.375
4	設計共同体B	57.325
5	設計共同体C	57.2

4. 選定の経過

令和2年10月23日(金)	公示
令和2年10月30日(金)午後5時まで	参加意思表明に関する質問締切
令和2年11月4日(水)	参加意思表明に関する質問回答
令和2年11月12日(木)午後5時まで	参加意思表明書提出締切
令和2年11月13日(金)	参加資格審査結果通知
令和2年11月17日(火)	現地見学会
令和2年11月19日(木)午後5時まで	企画提案に関する質問締切
令和2年11月26日(木)	企画提案に関する質問回答
令和2年12月2日(水)	企画提案書提出締切
令和2年12月7日(月)	第一次審査、審査結果通知
令和2年12月17日(木)	第二次審査
令和2年12月18日(金)	審査結果通知・公表

5. 審査委員長講評

弘前市「教育自立圏」構想は、小・中一貫教育の推進と、学校・家庭・地域が密接に連携して子どもたちの学びの環境を育むことを目指すもので、本プロポーザルはパイロットプロジェクトとして位置付けられる。

本プロポーザルでは、既存の小学校と中学校が併設する敷地内に小・中一体校舎に加え児童館、公民館、出張所からなる複合施設を整備すること、教育活動を継続しながら建設を進めることが求められた。

技術提案は、地元設計事務所と共同企業体を構成した5者からの提出があり、10名の審査員による審査評価を総合した結果、最優秀者を《教育施設研究所・三上設計 設計共同体》、優秀者を《昭和設計・中央設計共同体》に選定した。応募5者はすべて現在の小学校屋外運動場に新施設を建設する配置計画で、2階建て案と3階建て案に大きく分かれた。

最優秀者は2階建てとし、1階は学校、既存体育館、児童館・公民館等を分棟化することで〈みんなのみち〉と呼ぶ外部通路が生まれ、正門（西側）と北門からのアクセス性を高めた。2階は全ての用途を一体化することで複合用途の集合性を高めている。技術提案書では2階に集約した教室廻りを中心とする活動が図面やスケッチで効果的に示され、空間イメージが非常に明快な提案である。

今後の設計で求められる課題としては、まず特別教室と職員室など管理部門の配置、特別支援学級の位置づけ、「教育自立圏」構想を前に進めるため不可欠な地域住民（協力者）の校内拠点確保など今後ユーザーとの対話を丁寧に行いながら設計を進めること。そして、技術提案では県内有数の豪雪地帯である弘前特有の雪害・除排雪に対する計画は具体的に示されたが、環境計画においては自然換気や重力換気を主とする中間期の提案のみに終始した。弘前市は冬期−5℃を下回る日も少なくない。そのため室内外で生じる30℃近い温度差により起きる現象とりわけ結露をどう解消するか、冬場に窓を積極的に開放できない環境にあって室内空気の清浄状態をどう保つか、現在の校舎と比較してエネルギーコスト増加を最小限に抑えるにはどうしたら良いかなど技術的検討の余地がある。

コンペは作品、プロポーザルはパートナー選びと言われるように、今回も最優秀者の技術提案書をその通り実現するのではなく、児童・生徒・保護者・地域住民・教員・職員・教育委員会などこの施設に関わる関係者とこれから繰り返し対話を重ねながら理想的な施設づくりを目指していくことになる。

最優秀者の現段階の計画によると、令和5年5月に校舎が完成し、令和6年7月には施設すべてが完成する。新校舎では地域や弘前を題材とした学び「ひろさき卍(まんじ)学」が繰り広げられ、地域への愛着と誇りを持った石川の子どもたちが、広く世界や地域で将来活躍する人材へと育っていくことを切に願っている。